

➤ 医師の指導を受けずに使う コンタクトレンズのトラブルが多発

「合わない眼鏡・コンタクトレンズ」は、過矯正だけがもたらすわけではありません。ん。

たとえばコンタクトレンズは、角膜を傷つける恐れがあります。その要因としてはまず、レンズが角膜に直接触れるので、装着時に角膜を傷つけやすいことが挙げられます。また、コンタクトレンズは角膜の表面にふたをするようなものです。コンタクトレンズで角膜の表面をぴったり覆ってしまうと、角膜の表面が涙から酸素を吸収できずに、酸欠状態となってしまいます。角膜が酸素を十分に取り込めなければ、代謝活動が低下し、涙の量が減るといふ悪循環に陥ります。

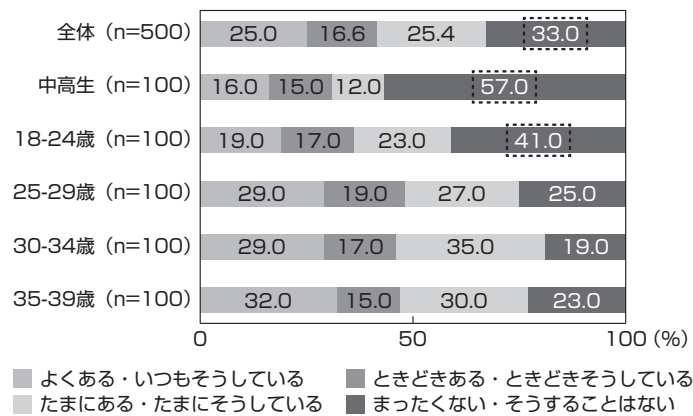
パソコンを長時間見ているとまばたきの回数が減りますが、エアコンなどによる空気の乾燥も一因となって、眼が乾きやすくなります。自分の眼鏡姿をみせたくないために、仕事場ではコンタクトレンズを使用する人は多いようですが、コンタクトレンズ使用者にとって冬場のオフィスはひじょうに過酷な環境といえるでしょう。

さらに、「カラーコンタクトレンズが問題となっています。最近では、「カラーコンタクトレンズ依存症」という人が増えているそうです。カラーコンタクトレンズで瞳を実際より大きく見せかけている人が、本来の眼を他人に見せられず、カラーコンタクトレンズを外せなくなるという状態です。化粧をしていない顔を他人に見られたくないのと同じ、女性独特の心理です。

コンタクトレンズは度数がないものであれば、医師の処方箋なしに量販店やインターネットで手軽に買うことができます。カラーコンタクトはファッションアイテムとして、若い世代を中心に普及率がどんどん高まっています(図●)。

しかしながら、カラーコンタクトレンズによるトラブルは跡を絶ちません。トラ

図2-6 カラーコンタクト購入時に眼科を受診するか



ジョンソン・エンド・ジョンソン「カラーコンタクトレンズユーザーの実態調査」をもとに作成

ブルを訴えるのは、十代の女性が圧倒的多数です。そのほとんどは、眼に角膜感染症などの炎症を起こすケースです。ほかにも充血や眼の痛み、目やにの増加などが症状としてあります。まぶたの裏側が赤く腫れる、結膜炎になるなど、重症になってからやっとなり常気づく人が多いのです。

カラーコンタクトレンズが登場したのは1950年代のことで、最初は映画などの特殊メイク用としてでした。ファッション用として広まりはじめたのは1990年代からです。そのころは「消費生活用品」と位置づけられていて薬事法の範疇外でした。そのため、品質の検査などの必要がなく、医師の指導がなくても買うことができました。しかし粗悪品が流通して、トラブルが相次ぎました。

洋服を着る感覚で気軽にカラーコンタクトを装用する人は多いのですが、角膜に直接ふれる以上、細心の注意をはらって使用しなければなりません。政府も、カラーコンタクトレンズによる事故があまりにも多いことを受けて、2009年に視力補正を目的としないカラーコンタクトレンズを、「視力補正用コンタクトレンズ」と同じように高度管理医療機器である」と定めました。以降、コンタクトレンズも薬事法の対象となり、品質や販売方法が規制され、薬事法上の医療機器販売業の許可を取得している販売店でなければ、コンタクトレンズを販売できなくなりました。

コンタクトレンズを医師の指導のもとに正しく選べば、このようなトラブルは防げます。角膜に直接触れるものである以上、使用する側にも細心の注意が必要なのです。その具体的な選び方については、第3章をご覧ください。